

氏名	市川 恵
ヨミガナ	イチカワ メグミ
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博音第259号
学位授与年月日	平成27年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 音楽教師の実践知の内容と構造 —インタビューと歌唱授業の分析を通して—

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	佐野 靖
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	山下 薫子
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	杉本 和寛
（副査）	東京大学	准教授		藤江 康彦

（論文内容の要旨）

筆者は、大学学部時代の同級生であるT教諭の新任当時からの授業観察やインタビュー、協働での授業づくりを行う中で、T教諭自身の教師としての変化や成長というものを目の当たりにしてきた。そこには、試行錯誤しながら、目の前の子どもたちと共に、よりよい実践を創出していこうとするT教諭の姿があり、T教諭の「教師としての力量を形成していく様相やその軌跡」というものが、本研究の発端となっている。教師は、実践経験から得た個別で固有の知識をもち、その知識を状況に応じて用いているの。音楽授業で実際に生きて働く音楽教師の実践知の様相を描くと同時に、一人の若手教師の授業を継続的に参観し、その変容過程を微視的に捉えていくことによって、力量形成の内実を実践知の形成と変容という観点からとらえたいと考えた。

本研究の目的は、次の2点である。

第1に、教師の実践経験、すなわち教師側のパースペクティブを尊重する立場に立ち、教師の発話分析から音楽教師のもつ実践知の具体的な内容を同定すると同時に、事例分析を通して、その構造の解明を試みることである。

第2に、一人の若手教師に焦点を当てた継続的な参与観察を通して、教師の力量形成の内実を示すものとしての実践知がどのように形成され、質的な変容を遂げる中で構造化されるのかを解明することである。

本研究の内容は、以下の通りである。

第1章では、音楽教師の実践知を内容と構造を提示する前提として、教師というものがどのようにとらえられてきたのか、「教師像」を明らかにすること、教師はどのような知に基づいて授業を行っているのか、教師の実践知の特質を明らかにすること、熟達の観点から教師の成長・発達をとらえることの3つの観点から、本研究の基盤となる関連研究を探った。その結果、多くの教師は子どもや同僚となる教師との出会いの中で、省察と実践化を繰り返しながら適応的熟達を遂げていき、その発達の過程では授業実践の個性化が生じることが示唆された。

第2章では、教師の実践経験、すなわち教師側のパースペクティブを尊重する立場に立ち、教師の発話分析から音楽教師のもつ実践知の具体的な内容を同定すると同時に、事例分析を通して、その構造の解明を試みた。藤原ら（2006）や坂本（2013）の先行研究に基づき、「授業観」、「授業構想」、「授業展開」の3層から捉える枠組みにしたがって、発話をコーディングし、カテゴリーを生成した結果、6つのカテゴリーが生成されると同時に、事例分析を通して、音楽教師の実践知の構造も3層から捉えることが可能であり、それらは連動性をもつことが明らかとなった。

第3章では、一人の若手の音楽教師のインタビュー分析、授業実践の事例分析、授業者自身が日々の授業の

構想、実際の展開、省察を書き記している「授業ノート」の分析を通して、各年度における同一教材による授業を縦断的に比較し、その際、第2章で明らかになった音楽教師の実践知の内容から、その形成過程を考察し、実践知がどのように構造化されていくのか検討を行った。

その結果、本研究における結論は、以下の3つに集約される。

①音楽教師の実践知は、授業観、授業構想、授業展開の3つの層から成り立っており、授業観を基盤として、授業構想がなされ、それを具現化した実践が授業展開といえることから、これらは連動性を含んだ3層構造をもつととらえられる。また、授業観は授業展開にも反映される。

②音楽教師の実践知の内容としては、3層構造に対応する形で、授業観に関しては、「歌唱授業における子どもの学習過程」、「歌唱授業における教師の姿勢」、授業構想に関しては「子どもの実態把握」、「教材研究」、授業展開に関しては「歌唱表現を高める手立て」、「授業における即時的な対応」の6点が挙げられる。授業展開において、授業構想とのずれが生じた場合には、念入りな教材研究のもとに即時的な対応がなされ、授業の方向性が調整される。

③音楽教師の実践知の形成にあたっては、他者の方法など新たな実践を取り入れることによって、自らの授業観を問い直したり、自らの授業を省察し、修正を施した実践を再度行うという省察と実践化を繰り返したりする中で、実践知は獲得され、質的な変容を遂げる。つまり、授業観は省察を通して編み直され、それに伴って授業構想や授業展開における実践知もスパイラルに質的に高まっていくものと考えられる。

(総合審査結果の要旨)

本論文は、熟達教師の発話分析等を通して音楽教師のもつ実践知の内容を構造化し、さらに1人の小学校音楽科の若手教師を対象とした歌唱授業のフィールドワークから得られたデータ資料をもとに、音楽教師の実践知の形成過程やその質的な変容を明らかにしようとしたものである。その結果、音楽教師の実践知は「授業観」「授業構想」「授業展開」の3層が連動する構造をもち、内容的には「歌唱授業における子どもの学習過程」や「教材研究」など6つのカテゴリから成っていること、また省察と実践化を繰り返す中で、実践知が質的な変容を遂げることが明らかになった。

本論文の成果は、次の2点に集約できる。

第1に、4年あまりの長期にわたり1人の若手教師の授業実践に深くかかわり、授業観察や実践提案、インタビュー、さらには対象教師の記述した授業ノートを通して収集した膨大なデータ資料に基づいて、実践知の形成過程と質的な変容を実証的に明らかにした点である。

第2に、熟達教師へのていねいなインタビューと熟達教師の事例の分析を通して、音楽教師の実践知の3層構造と6つのカテゴリ、そこに含まれる15のカテゴリの内容を仮説的に導き出した点である。

ただし、いくつかの課題も残った。その1つが、集積した膨大なデータの一部は本論にも示されていたが、その全容が参考資料として添付されなかった点である。個人データという問題はあるにせよ、分析や解釈の基盤となった1次資料を添えることによって、より有効な再検証が可能になったと考える。また、教育学の知見を無批判に音楽科の援用している点も、もう少ししていねいな説明が求められる。対象教師の実践知が、子どもや先輩教師とのかかわり、教材の解釈、演奏と指導のとらえ直しなどを通して質的に変わっている様子は述べられているものの、音楽科教師に固有の熟達として明示できなかった要因は、理論的な枠組みに対する批判的な検討が不十分であったためと考えられる。さらに、先行研究のレビューに関して、網羅的に検討がなされてはいるが、本研究における申請者の立場やスタンスとの関連については、それほど明確に述べられていない。

このような課題を残すものの、本論文が音楽科の教師研究や授業研究に大きな一石を投げ得る内容であることは間違いなく、博士学位論文としての水準に達していると判断した。